

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720239
 研究課題名（和文） 社会的知識としての人類学：ロシア民族学・ロシア社会学・社会人類学の総合化の試み
 研究課題名（英文） Anthropology as a Social Knowledge: A Synthetization of Russian Ethnography, Russian Sociology and Social Anthropology
 研究代表者
 氏名（アルファベット） 渡邊 日日（Hibi Watanabe）
 所属機関・所属部局名・職名 東京大学・大学院総合文化研究科・講師
 研究者番号 60345064

研究成果の概要：本研究の根本的な問題関心は、社会に於いて知識は如何に生成し、流通するか、そしてそうした知識は文化・社会人類学という知識の体系と如何なる関係にあるのか、である。この問いを、ロシア・ソヴィエト民族学とブリヤート民族誌を縦軸に、ソヴィエト連邦とポスト社会主義時代のロシアの政治社会を横軸とする、政治体制の変容と社会的知識との関係性という問題構成に統制し、本研究では、両者の関係が従来の想像以上に複雑であること、社会的知識の可塑性が見られることを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	270,000	3,670,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：分化人類学・分科人類学・民族学

キーワード：知識，ロシア民族学，ロシア社会学，社会人類学，ブリヤート民族誌，ソヴィエト連邦

1. 研究開始当初の背景

人類学の課題の一つは、対象社会に関するデータを収集し、それを一般的視野の下で分析することにあるが、同時に、人類学自体がそうした営為を通じて、当該社会に於いて一種の知識となる。書かれ、出版される民族誌は、人文社会科学という学術の中だけで流通するのではなく、広く開かれた言説空間の中で一個のテキストにもなる。こうしたテキストとしての民族誌乃至は人類学という視角は既におおかた共有されていると言って良

い。とりわけ、(ポスト)植民地主義と人類学的営為との相関関係が強く議論された以降は、そうである。本研究テーマは、寧ろ、テキストとしての民族誌や人類学理論が実際にどの様な形で社会的知識となるのか、その過程を見ようとするものである。社会的知識の産出・流通・受容を制度化する一つのテキストでありメディアでもある人類学の様相を、ソ連時代及びポスト・ソ連時代のロシアを地域的对象として、考察しようとする。筆者は、学部時代より一貫して、シベリア南部に居住するブリヤート人の民族誌的研究

と社会人類学の理論的検討を行ってきたが、本研究テーマもその延長線にあり、より一般的な展望の下に議論を拡大しようとするものである。

ソヴィエト体制は民族を単位にした連邦制と社会主義イデオロギーとを基盤とした政治体制を採っていた。そこでは、人類学を含め学術活動が高度に政治的な脈絡の中に位置付けられていた。これは、単に(しばしば想定されるように)学術活動が政府からの監視状態にあったということだけを意味するのではない。民族を単位にしているということは、当該民族に関するデータの重要性が他の政治体制と比べて極めて高いことでもあり、進歩史観を含む社会主義イデオロギーを奉じていたということは、人類学の実践(民族誌の公表や民族理論の展開)自体が、国民のより「高度な」社会認識をもたらす筈だと措置されていたということでもある。即ち、現状認識とその理論化、そして理論や認識の社会的還元という一連のメカニズムが存在していた訳であるが、理論がそのまま社会に受容されるということは想像しにくい。従って、政治に学問が状況付けられていたと確認するのみでは議論として不十分であり、状況付けられながらも結果として学問の成果(民族誌や理論)が、政治の枠組を超えた効果をもたらしたり、政策が予期しない目的を設定してしまったりしているという可能性を見据えた立論が必要である。交付希望期間に於いて、ロシア・ソヴィエト国家に於ける民族誌(正確に言えば、民族をめぐる知識の総体)の社会的位相について、プリヤート民族誌の流れを土台にして、考察したいと考える。それでもって、より先のテーマ、社会的知識を作りながら、自らそうした社会的知識の一部となるという人類学の自己言及性や存立基盤に関する理論的吟味が準備されると予想している。

2. 研究の目的

本研究テーマは、スタイルとしては、民族学史・社会学史・科学人類学を組み合わせた形になる。貢献としては、まず、政治によって学術が弾圧されていたとする「弾圧」史観を主流とするロシア・ソヴィエト地域研究に対して挙げられる。人類学に対しては、ロシア・ソヴィエト人類学の再構成のみならず、人類学が政治体制の中であって存立していること自体への理論的解析が本研究によって可能となる点で、一步前進と考えたい。また、1998年以降、経済復興を遂げたロシアの現状に於いて、宗教「復興」や社会運動が如何なる知識を産出し、如何なる言説を配備しているのかを現地で調査することで、学説史研究と民族誌的研究の融和の可能性を考え

たい。

3. 研究の方法

(1) 2006年度：この年度は研究プロジェクトの開始にあたり、研究の様々な工具類(パーソナル・コンピューターや基本書籍)の整備から始めた。ソ連時代の全体的状況を考察すべく、ソヴィエト社会学の基本文献(英語とロシア語)の選定と購入にあたった。反省点として、想定していた以上に文献の購入に予算がかかり、結果として海外出張が不可能になったことがある。本務校の図書室で、「ソヴィエト民族学」誌の目次を収集した。欠号分については、大阪の国立民族学博物館にて収集し、全号を網羅することが出来た。ソヴィエト初期に於けるソヴィエト民族学の勃興について、資料収集できたのは特に有益であった。同時に、時代毎に主要テーマの変遷について分析を行った。「社会学研究」誌については、テーマのグループ化の作業はまだ半分であるが、他の1910年代のロシア社会学の基礎資料とともに、北海道大学スラブ研究センターにて収集した。特に研究の重心を置いたのは、ロシアがソヴィエト連邦になる過程に於ける社会学および民族学の変遷である。その結果、社会学であればコヴァレフスキイ、ソロキン、民族学であればシュテルンベルグやタン=ボゴラズらの立論(とりわけ独立した学の形成に於ける論理)の大枠が解析できた。どちらも、新生ソヴィエト体制に限定づけられながら、西欧の対応物とは異なる路線を模索していた有様が明らかになった。

(2) 2007年度：この年度は、主に、昨年度収集した文献資料の整理と解説、および秋に現地調査を行った。に関しては、特に、ソヴィエト民族学の発展過程の分析を行った。ソヴィエト民族学の発展に於いて必ず注視しなければならないのは、長年民族学研究所の所長を務めたプロムレイのエトノス(*etnos*; 英語の ethnicity と近似の概念)理論である。これは、ソヴィエト連邦の官製とも言うべき理論体系であり、ソ連型・民族別連邦制を支える正統性の根拠でもあった。従来、官製ゆえに、十分な精読もないまま批判されていたエトノス理論を、内在的に読解し、理論展開のプロセスを微視的に追究した。その結果、確かに官製ではあったが、ソ連社会主義体制とその現実をそのまま追従する内容ではなく、同時に批判する役目も果たしていたことが了解された。この視点は新しいものと言えるが、その新しさは、民族学だけでなく社会学、特に民族学と領域が重なる民族社会学(*etnosotsiologija*)の形成過程と議論の特徴を吟味し、民族学と比較することでもつ

て、得られた。

2007年9月、ロシア連邦のハバロフスク市とブリヤート共和国にて民族誌的現地調査を行った。ハバロフスクでは、地方行政に於いて社会運動と環境政策についてヒアリングを行い、ブリヤート共和国では最新の研究について情報収集しつつ、青年組織・社会運動・宗教「復興」などについてヒアリングと参与観察を行った。

また、この年度に於いては、副産物とも言える成果があった。文化・社会人類学という知識の特徴について検討を進めているとき、民族誌に於ける説明の様式（何を如何なる術語で説明するか；例えば、言語現象を文化で説明する、ジェンダーを階級で説明する、など）の点で、文化・社会人類学の民族誌と言語人類学の民族誌との間に差異があることに気付いた。この点を詳しく論じ、公表したのが、論文「マルチリンガリズム論と如何に向かい合うか：『言語』人類学の説明の様式と論理に関する幾つかの省察」である。この論考は、ロシア・ソヴィエト民族学と直接には交差しないが、ロシア・ソヴィエト民族学に於いて説明の様式が如何なる論理を秘めたものであったのかという観点の重要性に目を開かせることとなった。

(3) 2008年度：最終年度となる2008年度では、これまでの研究をまとめ、さらにデータを積み重ねることが目標とされた。社会運動や青年政策などについては「公共性を問うとは如何なることなのか：『ポスト社会主義』期南シベリアに於ける地方行政と社会運動について」と題して学会発表を行った。以下がその報告要旨である。

1991年末にソヴィエト社会主義共和国連邦が解体し、民営化が進んだとき、ロシアで生じたのは「イデオロギー的真空状態」であった。厳しいイデオロギー統制、宗教「弾圧」、経済活動の統制といったソ連時代のイデオロギーが消滅したことは、同時に、当該社会に於いて何を中心的な社会価値とするかをめぐるコンセンサスの消失でもあった。ソ連型連邦制を引き継いでロシアは民族別連邦制を採り、そこでエスノ・ナショナリズムへのポピュリズム的動員を企て、ある程度それに成功した。いずれにしても、社会主義時代の特徴を残しつつ、それを否定することでもって1990年代は、ポスト社会主義と評することが出来た。

その後プーチン体制を経て、石油価格の高騰、国内産業の発展、それに伴う外貨の流入により、ロシアはBRICsの一つとしてテイク・オフし、2000年

代中葉にもなると、一種のバブル経済に突入した。政治的にも、正統性の立脚点が社会主義時代の評価をめぐる論点ではなく、1990年代をめぐる論点に移り、「ポスト・ポスト社会主義」と言われる様な状況が出現した（Prozorov [2005]; cf. 拙稿 [2008]）。だが、社会統合の問題が解消された訳では断じてない。寧ろ、1990年代に準備され、近年経済発展を背景に実行されている、「上からの」公共性・市民社会の創出が、いま色濃く観察できる。

以上の背景を踏まえ、本報告は、2003年秋と2007年秋の現地調査に基づき、ロシア連邦ブリヤート共和国の首都ウラン＝ウデで展開されている地方行政と社会運動団体との関係を予備的に論じる。具体的には、10代後半から20代にかけての青年層を対象とした政策及び行政と、社会運動団体「イストーク」[水源の意味。仮称]の実際の活動を取り上げ、(ポスト)「ポスト社会主義」期ロシアに於ける市民社会と公共性について考察する。報告の主たるデータは、「イストーク」の職員へのインタビューと活動記録、「イストーク」などの団体が組織した行事への参加者からの聞き取り、関連共和国省庁でのヒアリングなどである。同時に、市民社会概念に関する理論的検討（拙稿、2004）と民族誌的記述とのインターフェースも示唆したい。

報告では、ロシア民族学・社会学、ブリヤート民族誌での記述の問題と、調査データの持つ意味とを重ね合わせた検討は出来なかったが、行政が社会的知識の創出に大きな役割（例えば、法令の制定、そこに見られる言説）を果たしている現象について、洞察が得られた。

宗教「復興」については、簡単であるが、「ブリヤート：宗教『復興』と青年政策」と題して雑誌で成果を公表した。

本研究を公表すべく準備し、一定の総括を図るべく、ソヴィエト民族学を強力に支えたエトノス理論の全体像を、論文「ロシア民族学に於けるエトノス理論の攻防：ソビエト科学誌の為に」にて示すことが出来た。ソ連時代後期、民族学研究所所長を長らく務めたブルムレイによるエトノス理論は、ソヴィエト民族政策を支える一種の社会工学と従来理解されてきたが、本論文で、マルクス＝レーニン主義の理念とソヴィエト型連邦制及び社会的現実との相克の中で生じた、高度な理論体系を持ったものであり、学としての民族学の独自性を支え、さらにはソヴィエト社会の現実を批判しうるものであったことを示

すことが出来た。これは、日本語でも英語でもロシア語でも議論されていない論点と言える。2008年度、ロシアでの文献調査を予定していたが、収集を計画していた文献、1920年代の『郷土研究 [露語]』と第二次世界大戦中・直後（それゆえ入手が困難であった）の『ソヴィエト民族学 [露語]』が折りしも日本でマイクロフィッシュからの復刻版の形で出版された結果、経済的にも労力的にも効果的に調査研究を進めることが出来た。これらの文献を駆使した本格的な研究はまだ完成していないが、近い将来、論文「ロシア民族学に於けるエトノス理論の攻防」を発展させる形で成果を問いたいと考える。

4. 研究成果

(1) 本研究の重要な成果は、1本の論文としては長大な「ロシア民族学に於けるエトノス理論の攻防」(2008年12月発表)である。以下、その構成と要旨を示す。

- 1 問題の設定
- 1.1 はじめに
- 1.2 ソヴィエト民族学と民族をめぐる問題構成
- 1.3 本稿の構成
- 2 ティシュコフによるソヴィエト民族学及び民族理論批判
- 2.1 批判の矛先
- 2.2 民族から国民へ
- 2.3 民族学の民族問題研究への転換
- 3 シロコゴロフのエトノス論
- 3.1 民族学の基礎問題としてのエトノス概念
- 3.2 エトノスの定義
- 3.3 過程・環境・適応
- 3.4 エトノスの環境と制度
- 4 プロムレイのエトノス理論
- 4.1 エトノス理論にとっての「固い核」とプロムレイの意図
- 4.2 プロムレイのエトノス理論の骨格と特徴
- 4.3 個人という問題構成と民族(エトノス)社会学,そして攻防戦の一つの帰結
- 5 終わりに

本稿は、ロシア・ソヴィエト民族(誌)学の流れでエトノス(*etnos*)概念がどの様に用いられたのか、その理論的軌跡を追う。先ず、「固い核」と「防御体」の考え方(ラカトシュ)を暗示として、ある理論体系を記述する時に留意すべき枠組について考察する。第2節では、ティシュコフのエトノス理論批判を見て、彼が主張する「国民=市民」論が

政治思想としては理解し得るが、ソヴィエト・エトノス理論の骨格を揺るがす理論的批判にはなっていない点を指摘する。第3節ではシロコゴロフのエトノス概念を検討し、環境やエトノス間関係の中でエトノスが常に過程としてあり、極めて動態的なモデルが提出されている点を確認し、それが近代国家の諸制度と親和性を持ちにくいことを述べる。第4節では、プロムレイが主導したソヴィエト・エトノス理論がソ連型民族別連邦制と強い連関を持ちながらも、歴史学や社会学とのディシプリンをめぐる民族誌学の自立性を保ち、ソ連体制を批判する論理的可能性すら秘めたものであったことを結論付ける。

(2) 上記の論考は、ソヴィエト科学史研究のみならず、社会人類学と知識社会学との融合を試みた点で文化・社会人類学史への貢献となる。

(3) 社会構造と知識との関係についての理論化が今後必要となる作業となるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

渡邊日日「ロシア民族学に於けるエトノス理論の攻防：ソヴィエト科学誌の為に」高倉浩樹・佐々木史郎(編)『ポスト社会主義人類学の射程』,国立民族学博物館調査報告第78号,査読なし,2008年,65-109頁。

渡邊日日「ブリアート：宗教『復興』と青年政策」『季刊 民族学』124,査読なし,2008年,36-40頁。

渡邊日日「マルチリンガリズム論と如何に向かい合うか：『言語』人類学の説明の様式と論理に関する幾つかの省察」『ことばと社会』(三元社),第10号,査読あり,2007年,68-93頁。

〔学会発表〕(計1件)

渡邊日日「公共性を問うとは如何なることなのか：『ポスト社会主義』期南シベリアに於ける地方行政と社会運動について」日本文化人類学会研究大会,2008年5月31日,京都大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡邊 日日 (Hibi Watanabe)
東京大学・大学院総合文化研究科・講師
研究者番号 60345064

(2) 研究分担者

なし。

(3)連携研究者
なし。